

## ムスリムと日本社会の共生についての一考察

修紅短期大学 氏名 白石雅紀 (会員番号 0061226)

キーワード3つ: 国際福祉 共生 イスラーム

### 1. 研究目的

イスラーム（イスラム教）はキリスト教に次ぎ、世界で2番目に多くの信者を持つ宗教である。イスラームに帰依するムスリム（イスラム教徒）の数は全世界で15億人を超え、その数はさらに増加する傾向にある。我が国においても留学生を主としてムスリム人口は増加している。また、2008年に発行した日本・インドネシア経済連携協定による、イスラーム国家のインドネシアより看護師候補者や介護福祉士候補者の受け入れ等、今後ともグローバル化の進行とともに、我が国におけるムスリム人口は増加すると推測される。現に昨年7月に東南アジア5カ国の観光ビザ発給要件が緩和されて以降、ムスリムが多いマレーシアやインドネシアからの観光客は増加の傾向にある。日本で存在感を増すムスリムではあるが、日本社会のイスラームやムスリムに対する認知度や関心は決して高いとは言えない現状がある。だが、今後とも我が国におけるムスリム人口は増加の傾向にあることから、日本社会とムスリムの共生について考察を行うことは意義がある。そこで本研究では、日本に滞在したムスリムへの聞き取り調査をもとに、日本で生活を送るうえでの課題や暮らしやすい点などをまとめ、ムスリムと日本社会の共生について考察することを目的としている。

### 2. 研究の視点および方法

本研究では文献研究を基にイスラームの特徴整理を行った後、日本に10年間滞在経験のあるムスリムと日本に1年滞在経験のあるムスリムの計2名に対して、聞き取り調査を行った。調査内容は主に1. 日本での生活で困難だったこと。2. 日本での生活で良かったこと。3. 今後、日本社会でムスリムが暮らしやすくなるために必要な点について等である。調査の後、これらの回答を整理し、先行研究と検証を行い、ムスリムと日本社会の共生について考察した。

### 3. 倫理的配慮

調査対象者には研究の目的と内容を説明し、結果は学会などで公表するが個人情報是对象者の国籍や性別、年代を含めて一切公表しないことを口頭で伝え、文書にて提示した。結果、調査対象者からは個人の情報の一切と個人の特定につながる情報を公表しないことを前提に調査協力の合意を得た。

### 4. 研究結果

調査に先立ち、先行研究をまとめ、イスラームの特徴整理を行った。ムスリムには様々

な決まりごとがあるが、イスラームは基本的に神と個人の契約であるため、解釈の大部分は個人に任せられるという側面がある。しかし実際は個人に解釈を任せられる場面はほとんどなく、その個人が暮らす社会のイスラームの規範に従って生活している場合がほとんどである。ただし、日本など非イスラーム圏の海外に滞在した場合、個人の解釈余地が大きくなる傾向にある。

続いて調査結果を整理する。いずれの調査対象者も日本での滞在は好意的であった。彼らはともに日本人に良くしてもらった体験や経験を話してくれた。だが、日本社会のイスラームに対する無知には驚いたようである。ムスリムには1. シャハーダ(信仰告白)、2. サラー(礼拝)、3. ザカート(喜捨)、4. サウム(断食)、5. ハッジ(巡礼)という信仰行為が定められているが、これらムスリムの信仰行為に関して多くの日本人はその存在自体を知らない場合が多い。日常生活においてもムスリムはハラールと言って、豚肉以外の肉でも正規の基準に乗っ取って屠殺された動物の肉以外は口にはいけない決まりがあるが、日本のレストランにおいてハラールの食品はほとんどない。さらに、酒やスカーフなどムスリムには様々な決まりごとがあるが、これらのムスリムの決まりごとをしている日本人は少なく、宴会の場で酒を勧められるなどの困った経験もしたそうである。結果として、彼らの日本における滞在は好意的なものではあったが、日本人にはもっとイスラームについて知ってもらいたいという希望を持っていた。

## 5. 考察

調査の結果より見えてきたことは、ムスリムと日本社会の共生を考える上で、まず日本人がイスラームについての理解を深めることが必要だということである。大部分の日本人はイスラームについて無知である。礼拝くらいは知っているかもしれないが、ラマダーンやハラールについて知っている人は少ない。また礼拝に関してもイスラームは神と個人の契約のため、柔軟に対応できる側面を持っていることまではあまり知られていない。ヨーロッパでは互いへの無理解と偏見からキリスト教徒とムスリムの対立が目につくようになっている。それに対してわが国でもイスラームに対する無知や無理解は、今後のムスリム人口の増加に伴い、偏見や差別へと転換する可能性も否定できない。今後我が国においてムスリム人口が増えることはほぼ確実なので、日本社会は現在のうちからイスラーム、ムスリムに対する興味・関心を持ち、相手の文化・価値観に対する知識を増やすことが求められる。ムスリムとはイスラームに帰依する者ではあるが、当然のように我々と同じ人間である。ムスリム人口の増加に伴い、今後日本社会ではムスリムと接する機会も増えるが、ムスリムということに拘り過ぎることなく、ごく当たり前に一人の人間として接する姿勢が求められる。そのためには相手を理解することが必要である。逆に無知や無理解は誤解や偏見、差別の温床となりえる。ムスリムと共生するためにも、まずはイスラームを知る、関心を持つことから我々日本社会は始める必要がある。